

# 西田哲学学会会報

第二十二号

題字 上田閑照

発行・西田哲学学会

〒九二九-1126

石川県かほく市内日角井一番地

石川県西田幾多郎記念哲学館内

電話(〇七六)二八三六六〇〇

## 西田哲学学会第二十二回年次大会報告

大熊 玄

西田哲学学会第二十二回年次大会が、令和六(二〇二四)年七月二十七日(日)、二十八日(土)の両日、立教大学(池袋キャンパス)およびオンライン上にて開催された。両日ともに東京の最高気温は三十六度を超える猛暑日であったが、オンラインだけでなく、多くの会員が会場に集い、パネル発表会・講演会・研究発表会・講読会・懇親会に参加し、有意義な議論・対話が交わされた。

今回の年次大会は、例年に比べ多数の個人研究発表の応募があっただけでなく、三つのパネル発表の応募もあり、そのためプログラム構成も例年と異なるものになっていた。通常は一日目午前にも実施されていた研究

発表を二日目の午前中にまとめて実施し、その時間にパネル発表会が開催された。また、一日目の午後には例年と同じく講演者が一名となり、その後二つの会場にてパネル発表が実施された。二日目は、個人の研究発表が午前から二会場で、午後はシンポジウムが開催された。二日間、講演者や発表者等の合計が二十四名のほり、これまでで最多の登壇者を有する年次大会であった。

また今回の大会では、一日目の講演会「西田、シェリング、ベルクソン」と、二日目のシンポジウム「西田幾多郎とベルクソン」が、テーマとして接続し、質疑の時間に互いの登壇者が会

場から発言する等、両者が有機的に結びつく様子も印象的だった。講演会やシンポジウム、『善の研究』講読、パネル発表については、それぞれの報告にゆずるとして、ここでは二日目の個人研究発表について、発表者名とそのテーマを報告したい。個人による研究発表は、二日目の午前二つの会場で、合計十人の発表者によって行われた。発表者とそのテーマは、発表順に以下の通り。

第一会場では、岩井洋子氏(東京女子大学)「後期西田哲学における「絶対無」―「無の媒介者」による対立の克服の論として」、浦井聡氏(北海道大学)「あるべかりし西田哲学」―田辺元初期の課題」、猪ノ原次郎氏

「北海道大学」「行為の必然性について―京都学派の実践哲学の再構成に向けて」、櫻井歆氏(日本大学)「西田宗教論にみる国家批判の論理」、菅原潤氏(日本大学)「阿部正雄の逆対応概念理解の射程」の五つの発表が行われた。

第二会場では、太田隆氏「西田幾多郎と日本国憲法について―比較研究論」、落合開智氏(立正大学)「永遠の今」における行為の位相―絶対無の自覚への接点として」、Richard STONE氏(早稲田大学)「純粹経験における「他者」―初期西田哲学と自我論の問題の再検討」、竹内彩也花氏(京都大学)「私と汝が「話し合ふ」こと―「表現」概念の検討から」、田口玄一郎氏(自由学園)「西田幾多郎と元良勇次郎―初期西田の「心理主義的」立場をめぐる両者の応答に関する一考察」の五つの発表が行われた。

最後に、本大会について「報告」というより、主観的な感想を述べたい。筆者は、年次大会の開催会場の実務担当として、これまで何回かこのような大会報告を書いたが、今回は前述の通り最多の登壇者ということもあって、内容の報告というより発表者とテーマの列挙となってしまう。しかし、この名前とテーマの数こそが、実際の大会の充実を端的に表わしている(と思っただければ幸いである)。

筆者が西田哲学館から立教大学に移ってから十年になるが、かつての西田哲学館での開催に比べ、大学での大会開催は不安が多い。西田哲学館では、その職員の皆が協力的で開催準備にあたってもらえたが、大学では基本的に教員が独りで会場準備をしなければならぬ。さらにコロナ以後は、ハイブリッド開催が望まれ、同時二会場でのオンライン対応も会場として必要だった。

いろいろと不安はあったが、幹事会の皆さんがわざわざ前日に会場に来てくれ、また、立教大学のデジタル担当の職員さんも想像以上に親切で、事前にノートパソコン(八台)やウェブカメラ・マイクなどの貸し出

しただけでなく、前日準備の設営も手伝っていただいた。こちらに来てから十年間、東京での開催年にはいつも会場として当地での開催が打診されながら実現できず、申し訳なく

講演会報告

「西田、シェリング、ベルクソン——自然哲学の現代ヴァージョンを考える——」

森野雄介

今回は檜垣立哉氏(専修大学)により、「西田、シェリング、ベルクソン——自然哲学の現代ヴァージョンを考える——というタイトルの講演が行われた。

これまでの著作で西田幾多郎とジル・ドゥルーズの比較などを行ってきた檜垣氏は、思弁的実在論の旗手の一人であるイアン・ハミルトン・グラントの『シェリング以降の自然哲学』を手引きに西谷啓治、西田幾多郎とベルクソン、ドゥルーズの比較を通じて二十一世紀の自然哲学のあり方を考察した。シェリングとベルクソンには共通する課題がある。それは現象と実在、時間と空間などのカント的な二元性の乗り越えであ

思っていた。それが今回やっと開催でき、しかも盛況であったことに感謝しつつ、そして特にトラブルもなく無事に終えたことに安堵している。

る。西谷啓治は卒業論文「シェリングの絶対的観念論とベルクソンの純粹持続」でこの点に着目した。西谷は哲学史が理念Ⅱ観念論的なプラトン主義と経験論的なアリストテレス主義の対立の変奏と反復であると捉える。檜垣氏は、シェリングがプラトン主義的な観念論の極北であるにも拘わらず、それを徹底させることによって「自然」を見出したという。そして、檜垣氏はこの発想には西田幾多郎の影響があると指摘する。檜垣氏によれば、この西田や西谷の観点は二十一世紀の現代でも依然としてアクチュアルなものである。ドゥルーズが論じた議論はシェリングのそれを引



き継いだものであり、それを指摘したグラントの理論は思弁的実在論に大きな影響を与えたためである。彼らにはシェリングの自然と自由の二律背反を構成する力動的プロセスの探求というプロジェクトが引き継がれている。そして、これこそ西田幾多郎がまさしく行っているものだ。この意味で、西田や西谷は現代の哲学の論脈のなかでも考えられるべきではないかと檜垣氏は指摘する。

とりわけ、今回の発表では、西田における「絶対無」・「永遠の今」を引き受けた西谷の「自然」解釈とドゥルーズの「無底」の類縁性に焦点が当てられた。ドゥルーズの場合、「無底」は過

去と現在の連続性を切断するものであり、これによって「生成」を自然と自由を構成する原理と

シンポジウム報告

「西田幾多郎とベルクソン」

杉村靖彦

「西田幾多郎とベルクソン」と題された本年度のシンポジウムは、例年通り、大会二日目の午後に開催された。この主題は、西田哲学研究において長く豊かな歴史をもつものである。西田がその初期からベルクソン哲学を深い共感をもって受けとめ、みずからの立場を形成していく

とらえることが可能になる。西谷の場合、「自然」は das Reale と das Ideale が「静的動、動的静」であると提示される。両者がともに思索するものは持続と超越論性の境目であり、このような問題系が二十一世紀の哲学にも引き継がれている。このため、日本哲学が二十一世紀の自然哲学に貢献できるのではないかと述べた。

質疑応答では、杉村靖彦氏(京都大学)、平井靖史氏(慶應義塾大学)など、多角的な観点からさまざまな質問が寄せられ、大いににぎわった。

上で無くてはならぬ同伴者として遇しつつも、究極的なところで袂を分かち、正面切つての批判を突きつけた経緯は広く知られている。そして、それが単に二人の哲学者のあいだの路線対立といったことには収まらず、存在と無、生と死、時間と空間(場所)といった哲学上の根本問



題をめぐる「巨人たちの戦い」であり、新たな創造的思索を喚起する無尽蔵の源泉であることも、事情を知る者には了解済みの事柄である。今回のシンポジウムでは、この「深き底」から新たな思索を引き出し、新たな争点を提示しうる力量を備えた二人のシンポジストにご登壇いただいた。平井靖史氏（慶應義塾大学）と中村昇氏（中央大学）である。司会は本報告を執筆している杉村靖彦（京都大学）が務めた。

平井氏は、PBJ (Project Bergson au Japon) の現代代表として、分析形而上学や認知科学、脳神経科学などもクロスオーバーする今日のベルクソン研究を率いるフロントランナーであり、マルチ時間スケール論とアスペクト時間論を通してベルクソンの時間哲学を大胆に再定式化するその仕事は、国内外で大きなインパクトをもたらしつつある。その平井氏の提題「瞬間の未完——拡張ベルクソン主義者西田幾多郎——では、ベルクソンと西田を突き合わせるための特権的な主題として、「永遠の今」が取り上げられた。過去・現在・未来という時制に定位して時間を見ている限りは、ベルクソンの持続は「流れ」としてイメージされ、非連続性を排除しているという西田らの批判を誘発するが、それは、前後関係ではなく状況への視点の取り方に相関し

て時間をとらえるアスペクト時間論に基づき、「未完了相」としてとらえるべきものである。これを特徴づけるのは「生じつつあること」に即した「視点の内存在」であり、それに対立するのは「生じてしまったもの」に対応する「完了相」である。そして、平井氏が強調するのは、ベルクソンが時折語る「生の永遠」は、持続の各瞬間が体现する「本性的分節」の凝縮と緊張の極限として、「完結相」というアスペクトの下で理解すべきであり、そこにベルクソンにおける「永遠の今」の場所を見出すことができるということである。この洞察を拠点として、平井氏は西田のいう「永遠の今」をさまざまな角度から考察し、それがこの「凝縮モデル」をベルクソンと共有しつつも、無や否定を語る時にそこに収まらない揺れを見せることを示す。なぜそのようなことが起こってしまったのか。それが平井氏から西田への問いかけとなった。

中村氏は、ウイトゲンシュタインの研究から出発し、ホワイトヘッド、ベルクソン、そして西田を対話相手としながら、彼らのテクストのなかに潜り込んで共に思索し、中村哲学としか

言いようのない独自の思索を展開してきた研究者である。中村氏の提題「絶対無の場所」と「純粹知覚」では、平井氏と逆方向に、西田哲学から出発して、西田の「絶対無の場所」を独自の仕方位置づけ直した上で、ベルクソンのうちにこれに対応する概念を探りだそうとする。平井氏が違和感を示した無や否定という西田のモチーフをめぐって、中村氏はそのステイタスを「裏面」という語で確定しようとする。この世界における有無の相対的対立を超えて包むとされる「絶対無」は、どこまでもこの世界に表面には出てこないがそれを裏打ちするものとして、有無対立以前の「場所」といふべきものである。この解釈を肉づけするべく、中村氏は世界構造を論ずる西田の主要な概念を参照するだけでなく、離人症をめぐる木村敏の考察をも引き合いに出し、この「場所」が時間の連続の裏面としての非連続に相当することを示す。その上で、氏はこの「存在の裏面」としての絶対無に対応するものが、ベルクソンの「純粹知覚」であることを主張する。事物を存続させる持続および記憶を全て除去した後にはただ「権利上」

存在する純粹知覚は、まさに存在を裏打ちする「無」であり、それだけを取り出せば純粹な非連続にほかならない。無の観念への徹底的な批判で知られるベルクソンが、にもかかわらずこの純粹知覚を導入したのは、ベルクソンの持続もまた「無に裏打ちされる」ことを必要とするからである。持続のただ中に「永遠の今」を見てとる試みは、まさしくこの洞察から出発しなければならぬのである。

以上のようにまとめるならば、「西田幾多郎とベルクソン」における「永遠の今」というテーマに対して、二つの提題が正反対の方向から接近し、それぞれの考察方向を徹底することで、たがいに鋭利な問題提起をしあう関係になっていることが分かる。そのことを反映して、議論の時間は両者の息もつかせぬ問いの応酬によって進行し、その熱気が会場全体を巻き込んで、きわめて濃密な討議が展開された。西田のテクストの解釈を競うだけにとどまらず、「永遠の今」という事柄そのものを皆で前のめりになって考えるという、本来の意味でのシンポジウムを体现する充実した時間であった。

# 『善の研究』 講読会報告

中嶋 優 太

『善の研究』講読会は、第二回大会（二〇〇四年）から続いている西田哲学会の伝統的な講座であり、第二十二回大会では七月二十七日（土）の大会初日午前中に実施された。大会のプログラム上は、『善の研究』第三編「善」第三章「意志の自由」を中嶋が担当し、第十一章「善行為の動機（善の形式）」を松本直樹氏が担当されることになっていた。しかしながら、大会一週間ほど前、松本氏が新型コロナウイルス感染症に罹患されるといいうアクシデントに見舞われる。幸い、大会の数日前には松本氏の熱は下がり、体調も回復されたものの、学会としては、講師として演壇に立つことは感染拡大の危険がないとはいえない、と判断し、松本氏の登壇を断念することとなる。かくして、急遽、中嶋が一人で講師を務めることとなり、また、講読範囲も第三章のみに絞られた。第十一章の読解を心待ちにされていた方、松本氏の名解説を期待されていた方には、大変申し訳のな

い次第である。

兎にも角にも、講読範囲が半分減り、一章分だけに二時間近くかけるということで、よもや時間が足りなくなる心配はなからうという余裕からか、当日は、講師も、参加者もなんとなくのんびりとした、くつろいだ雰囲気で読書会が始まった。まず、参加者が簡単に自己紹介をした後、中嶋が第三章の概要を示す。第三章では意志の自由に関連する哲学的問題（必然論か自由論か）を取り上げられ、両者の立場を批判する形で西田自身の「必然的自由」論が展開される、ということ。したがって、テキストを読む際には、それが、西田が批判する必然論・自由論を紹介している文章なのか、西田自身の立場である必然的自由論を展開している文章なのかを意識すると、迷子にならない、といった簡単な注意の後、講読が始まる。参加者がテキストを音読し、中嶋が簡単な解説を加え、時に具体例を出し、時にホワイトボードを用いて整理す

る。そして参加者からも盛んに質問が出る。

たとえば、われわれが日常的に感じている自由の範囲を特定する第二段落では、ホワイトボードに次のような図が書かれる。「×自然現象—○意識現象」。自分の身体を含めて自然現象は自由にはできず、自由があるとしたら意識現象の中だけである。「×観念の創造—○観念の結合」。しかるに、意識現象の中でも観念を無から作り出す自由はなく、観念を分離・結合する自由、操作する自由しかない。傍らには、下手糞なペガサスの絵が描かれる（観念結合の例のもりである）。さらに、観念や動機を操作する場面でも、何でもできるわけではない。「×動機が一つ—×動機の強弱—○等しい動機」。動機が一つしかない場合や強い動機がある場合は自由ではない。たとえば、「アルコールを飲みたい」という強い動機をもつアルコール中毒患者は、「水を飲みたい」という動機も持っていたとしても、アルコールを飲むほかにない運命である。自由があるのは、たとえば、コーヒーを飲みたい、紅茶を飲みたい、という二つの動機が同じ強さをもって釣り合う場合だけであ



る、云々。

その間、参加者からは鋭い質問・指摘が相次ぐ。西田が「動機」と言わずに「観念結合」という分かりにくい言葉を使うのは、「意」の側面だけでなく、知情意全体に妥当する議論を立てようとしているのではないかと等々。質疑を挟みつつ、なんとか第二段落の最後までたどり着く。そこでまた、参加者から納得がいけない、と声上がる。自由意志が観念結合の外に、つまり意識の流れの外にあるというのはおかしいのではないかと確かに第二段落を読めばそういうことになってしまうけれども、これはおかしい、と。

ここで交通整理が入る。第三段落冒頭を読めば明らかのように、第二段落は西田が後の段落で批判する「自由論」の議論の一部であるということ、参加者の皆さんが抱いた違和感は、西田自身が抱いた違和感であって、違和感があるのは当然なのだ、ということの説明とその場に納得したような空気が、一瞬、流れる。が、それも束の間、テキストを読み進めるにつれて、次々に疑問が湧き、質疑は終わるところを知らない。結局のところ、テキストを三

分の二ほど進んだところで時間切れとなる。最後に、本大会のご講演・シンポジウムにちなんで、ベルクソンの自由論を西田がどのように取り入れようとしたのかを紹介して、講読会を終えた。

十二分に時間をいただきながら、

パネル発表報告①

「Nishida's Auseinandersetzung with Hegel ——西田のヘーゲルとの『対峙』——」

Sova P. K. Cerda

第二十二回年次大会の初日午前に開催された多言語パネル発表では、企画者であるステイブ・ロフツ氏（南山宗文化文化研究所・ロイチ基金研究員）、大橋良介氏（日独文化研究所・所長）、および本報告の執筆者であるソヴァ・P・K・セルダ（京都大学・特別研究員）の三名がオンラインで発表を行った。

「Nishida's Auseinandersetzung with Hegel ——西田のヘーゲルとの『対峙』——」と題するパネル発表は、両者の思想の徹底的な探求を通じて、言語間・文化間の視点から「西田以後・ヘーゲル以後」の哲学的課題と

ら、テキストを読み切ることができなかったのは、ひとえに中嶋の進行の拙さゆえであるが、講師が頼りない分、参加者の皆さんの質疑が活発に行われたことが、はからずも参加者の皆様には喜ばれたようでもある。この点を慰めとしたい。

その展開を示すことを目的として企画された。

最初の発表では、セルダが『善の研究』の思想をポスト・カント的な形而上学として読む「ことをテーマに、「経験」をめぐる西田とカントの対峙を出発点とし、初期フイヒテの思想を経て、西田の「純粹経験」論をヘーゲルの「概念」論に結びつけようとする試みを行った。

次に、ロフツ氏は人倫 (Sittlichkeit) という観点から、西田の論考「絶対矛盾的自己同一」を取り上げ、絶対無と社会性の関係を深く掘り下げた。ロフツ氏によれば、絶対無は自己のう



ちに個人を包含する範疇ではなく、むしろ個人を個別者たらしめる自己否定的な概念である。

この「非関係的な無 (non-relational nothingness)」を基に、ヘーゲルの人倫論を修正し、現代における社会的課題に新たな視点を提供できるとロフツ氏は主張した。最後に、大橋氏は西田の論考「私の立場から見たヘーゲルの辯證法」を分析し、ヘーゲル哲学と西田哲学の切り結び点を探った。大橋氏は、西田のヘーゲルへの反論と、それに対するヘーゲルの再反論の可能性を展開し、それが単純に

「合理主義」対「非合理主義」といった対比図式に収まるものではなく、論理における必然性と体系性の問題、および現象学における事実性の問題を提起する「弁証法」そのものの性質に関するものであることを指摘した。

このような経験、概念、弁証法に関する複合的な問題は、西田哲学のみならず、哲学的思考一般にとつて今後の重要な課題を形成する。このような課題に焦点を当てる機会を提供した、今回の言語間・文化間の交流の場に感謝申し上げたい。

パネル発表報告②

「無我、無相、そして無の文化」

桑山 裕喜子

「無我、無相、そして無の文化」についてのパネル発表では、張政遠氏(東京大)による「無相の相」、邱奕菲氏(立正大)による「西田幾多郎と和辻哲郎の文化論における『形』とその現象学的意義」、桑山裕喜子(東京大)による「上田閑照の『自己の現象学』における無我と非我

第二十二回年次大会一日目の「無我、無相、そして無の文化」についてのパネル発表では、張政遠氏(東京大)による「無相の相」、邱奕菲氏(立正大)による「西田幾多郎と和辻哲郎の文化論における『形』とその現象学的意義」、桑山裕喜子(東京大)による「上田閑照の『自己の現象学』における無我と非我

「日記」(一九〇六年)に引用される白隠の公案「行住坐臥同隻手有何声」解釈が重ねて理解された。仏教関係では他にも元康

撰『肇論疏』や円珍(智証)『大毗盧遮那經指歸』より「無形之形」、「無聲之聲」、「無相の相」の言及がみられる。張氏は「形なきものの形」の具現例として、芸術活動や修煉技について触れ、西田幾多郎記念哲学館展示「無相の相——張燦輝写真篆刻展」やブルース・リーの「水」論を紹介された。目には見えずともおのずから展開するもののフォルムをありのままに捉えることの難しさについて強調された。

邱氏の発表では主に「無形」、「形」と「人格」概念について、それぞれ西田、和辻と、カントの超越論的哲学から見たアプローチとが比較された。新田義弘の言う「ノエシスの自」否定からなる「ノエマ」に示唆を得ながら、カント哲学における悟性の先験的なカテゴリーの「形」的側面と西田の「形なきものの形」が対比され、西田の「人格」概念には人間の経験世界の意味的統一体としての「形」が見出されうるという結論に導かれる発表となった。

桑山の発表では、上田閑照の「自己の現象学」の解釈を通し、上田のテーゼ「我は、我ならずして、我なり」という自己のあ



り方における「無我」の働きの重要性が強調された。『十牛図』の第九図と第十図に見出される「無為」と「無我」の関係性を、自己帰着や他己帰着の問題と照らし合わせて論じ、上田の解釈により、十二世紀の中国の僧の描いた『十牛図』が現代における他者問題と環境問題の根源を浮き彫りにする点が強調された。

パネル発表報告③

「ドストエフスキーと西田・西谷・滝沢」

竹花 洋 佑

本パネル発表は、哲学のみならず広く近代の日本思想に大きな影響を与えたドストエフスキーを軸として、西田幾多郎、西谷啓治そして滝沢克己の哲学の意味を浮かび上がらせることを目的として企画された。司会および企画者は竹花洋佑（福岡大学）であり、提題者はそれぞれ西田哲学の中堅研究者として知られている太田裕信氏（愛媛大学）と石井砂母亜氏（跡見学園）である。西田は後期において宗教の問題を論じる文脈でしばしばドストエフスキーに言及しているが、後期西田哲学に精

質疑応答では「形」、「個」、「人格」概念について、ゲリット・シュトラウラー氏（金城学院大）、湯浅正彦氏（立正大）、板橋勇仁氏（立正大）、秋富克哉氏（京都工芸繊維大）、長町裕司氏（上智大）より意義深い質問とコメントをいただき、今後の課題が明確となった。発表者全員の応答によりパネルは終了した。

通している太田氏と石井氏はその西田のドストエフスキー論を潜在的な対話相手とし、その議論を念頭に置きながら、それぞれ西谷と滝沢のドストエフスキー論の精密な検討を試みた。最初に太田氏が「西谷啓治とドストエフスキー——西田の解釈を踏まえながら」と題された発表を行った。よく知られているように、「ニヒリズムを通してのニヒリズムの超克」が西谷にとって哲学の根本問題であるが、そこに西谷のドストエフスキー理解がどのように関わっているかを太田氏は明らかにしよ

うとする。『ニヒリズム』（一九四九年）での西谷の構想では、ニーチェとドストエフスキーと仏教が論じられることになっていたが、ドストエフスキーについては、『ロシアの虚無主義』（二九四九年）で部分的に論じられるにとどまっていた。太田氏の発表は書かれざるドストエフスキー論を西谷が残したテキストから再構成しようとするものであった。太田氏によれば、西谷の議論の特徴はドストエフスキーの思想の中にニヒリズムの深まりを見ようとするところにあり、スタブローギンの「存在」のニヒリズムの底に、イワンの「精神」のニヒリズムを捉えようとするものであったとされる。次に石井氏が「滝沢克己とドストエフスキー——西田の宗教論を手引きとして」というタイトルのもと発表を行った。石井氏の扱う滝沢のドストエフスキー論は、六〇年代の大学闘争という社会状況をふまえたものであり、そこで語られるSchadende Freude（ドイツ語で「他人の不幸を喜ぶ気持ち」という意味）という問題に氏は注目する。滝沢はドストエフスキーが描いた革命に取り憑かれた者たちと



「連合赤軍」の若者たちを重ね合  
わせる。そして、そうした自意  
識という悪霊に取り憑かれた人  
間を外から眺めそこに  
Schadefreudeを感じる者たちと  
は同根であると滝沢は考える。  
こうした滝沢の問題意識を引き  
継ぐかたちで、石井氏は二〇二  
四年一月に死去した「東アジア  
反日武装戦線」のメンバー・桐

エッセイ①

西田哲学会における「不易」と「流行」

岡田 勝 明

一

平成十五年(二〇〇三年)に  
西田哲学会は発足したので、二  
十一年を経過したことになる。  
上田閑照先生に初代会長を願  
いし、続いて会長は、大橋良介  
先生、松丸壽雄先生、秋富克哉  
先生、現在は美濃部仁先生が二  
期目をスタートされている。

私も学会設立構想の当初から  
かわり、今年度まで理事とし  
て運営に携わってきた。設立前  
後の熱気は、かわらず胸にあり  
続けている。「石川県西田幾多郎  
記念哲学館」が創立され、また

鳥聡をめぐるメディアの報道姿  
勢にSchadefreudeに基づく「薄  
暗い自己満足」を捉えようとす  
る。

短い時間ではあったが、活発  
な質疑応答もなされ、ドストエ  
フスキーを軸にした近代日本哲  
学の捉え返しが大きな意味を持  
つ視点であることを実感させる  
ものであった。

『西田幾多郎全集』の新装版が刊  
行されつつあった当時、「学会」  
の発足は、これら一連の流れの  
中で、西田哲学研究を基礎づけ  
推進する意義をもったものとし  
て、必然的に求められていたで  
あろう。それにしても、設立の  
中心となった大橋先生を抜きに  
は、実現しなかった。その大橋  
先生も、今年度で理事を引かれ  
る。

「大橋・松丸」時代は、設立の  
趣旨を定着させ発展させること  
にその使命があった。次の「秋  
富・美濃部」の時代は、その流  
れを新しい西田研究の有り方と

してどのように発展させてゆく  
かの模索の時代、と言えるかも  
しれない。美濃部会長の二期目  
では、設立からの大きな区切り  
を迎えることになるし、そのよ  
うな試練を自ら課してゆかねば  
ならない、と思われる。新しく  
学会の意義を形成し、強い言い  
方をすれば、継続からの脱皮が  
試みられねばならない。ただし、  
切断はつねに接合とひとつであ  
る。截ることは、つなぎ直すこ  
ともである。したがってその試  
みは、西田哲学会の「非連続の  
連続」という「歴史」の本質に  
あるとき、まさに西田哲学を実  
践する「学会」であることにな  
るのであろう。

二

ところで「不易流行」という  
言葉は、芭蕉に見られる。「奥の  
細道」の旅を終えて、ほぼ五年  
後に作品『おくの細道』が書き  
終えられたが、その旅において  
獲得された「思想」が「不易流  
行」だとされる。服部土芳の『三  
冊子』は、つぎのように芭蕉の  
考えを伝えている。「師の風雅に  
万代不易あり、一時の変化あり。  
この二つにきはまり、その本一  
つなり。」

俳諧という詩語の「まこと」

(事と言の相即)は、「不易流行」  
にある。「風雅の誠」が、「不易  
流行」にあるからである。「風  
雅」は「俳諧」のこととされる  
が、ここでは「俳諧」の生まれ  
る「初め」にあるものを「風雅」  
と解しておきたい。

「不易」と「流行」は、二つで  
ありながらじつは「本は(本質  
は)ひとつ」である。「流行」の  
成り立つ核心に「不易」があり、  
「不易」が有たれるところは「流  
行」である。ものは本来あるが  
ままに、つまり自然に、その存  
在の「ところ」を与えられてい  
る。そのことが、たとえば一個  
の林檎の、不易な存在感を輝か  
せている。個物としての林檎の  
ひかりは、与えられた場所を包  
むひかりを受けている。ひかり  
に包まれながらも、すべての存  
在は、自然に歩を進めて、無常  
に虚空の中に消えて行く。消え  
て行くのも、与えられた「ところ」  
のうちである。虚空に空し  
く響くことばが、物事と相即し  
うるのは、「自然」にあるこの  
「不易」と「流行」の両面が一つ  
の本質であることによらなけれ  
ば、おそらく起り得ない。

そのような自然の理を生きる  
には、「せめる」ことが求められ  
る。「せめる」とは、「不易を知

る」、またそのことが「誠の変化  
を知る」ことであるように、「心  
をこらすこと」である。「心をこ  
らす」とは、「一步自然に進む」  
ことである。しかし、進むこと  
は元に戻ることに、進歩が退歩で  
ある。そこに「自然の理」があ  
る。

『三冊子』には「せめる」とい  
うことについて、「新しきはつね  
に責むるがゆへに一步自然に  
す、む地より頭はる、也」と言  
われる。しかも「文台引き下ろ  
せば即ち反故也」と、文台から  
懐紙が降ろされればそこに認め  
られた句は反故となる、つまり  
連歌は三十六歩、付け句が進む  
時空がすべてだと言っているのである。  
すなわち「風雅の誠」の真髄  
は、句と句との「句い付け」を  
「せめて」、「すすむ」、流行のた  
だ中の不易の現在性という「付  
け句の時空」にある。ここでは、  
今ここで、心は、心から心に、  
直に通い合っているであろう。

三

右に述べた芭蕉の「不易流行」  
を思いながら、まず簡潔に、「哲  
学」における「不易流行」とい  
うことについて述べておきたい。  
「風雅の誠」にあたる「哲学の  
誠」は、何であろうか。それは、

哲学の「初め」に求められるであろう。西田であれば、「人生の悲哀」ということになる。ではつぎに、「悲哀」の「不易流行」とは、どのように考えられるであろうか。悲哀のただ中にこそ悲哀を包むものが現れる、悲哀がかえって悲哀の底となることで悲哀を超えるものとなる、という悲哀の矛盾が、「不易流行」のすがたとなるであろう。

しかしここでも見のがしてならないことは、芭蕉の「文台下ろせば反故也」ということの強調である。「不易流行」という「理」は、その「事」、「せめ、すすみ、一步もかえらない」という現在性と離れては、「誠の理」とならない。詩語を極めることが、目前の自然の出来事を言いとめることであるかぎり、それは、事実の底におりること、つまり事実そのものに徹底すること、求められる。そのような事実立つことが、自己の存在そのものを深める「行道」を歩ましめる。

西田哲学の「初め」は、「哲学以前」であるが、哲学の道を進む先の「哲学以降」は、また「初め」に「退歩」することであるところに、西田哲学の「哲学」がある。その哲学はしたがって

「道を歩む」行道に通じる。最後に、「哲学」の「不易流行」をふまえて、「西田哲学会」のそれに言及しておきたい。特に指摘しておきたいことは、哲学が発こる「初め」に立つということである。「初め」の根源性と現在性こそが、哲学の「以前」となり「以降」となる「不易流行」の核心であり、そうであればこそ各人の「行道」とつなが

エッセイ②

「物を造る人」のための西田哲学

岡田基生

どんな小さなことにも何か新しい考へ方をして生活を変へて行く、良くして行くことの出来る人、物を造る人、さういふ人が知識人である、といふ考え方にならねばならぬ。

一九四六年五月、三木清の遺言のように『国際女性』に掲載された「知恵の秩序」の一節である。日本では、知識人が「本を読んで物を知っている人」と捉えられる傾向がある。しかし、原始的な状態では「いろいろ

る。学会がそのような「歴史」の「場」であることが、忘れられてはならないであろう。目前で発表し議論する生きた顔の中に、西田幾多郎の面影を思わせるさまざまな顔が浮かび、互いに懐かしい思いを抱き合える「ところ」であることが、学会の存続を支えるものであると思う。

ろな技術を持っていて物を造れる人」が知識人であった。そのような知識人を復活させる必要があるという。彼が知識人像の転換を求めた背景には、一九三〇年代以降の日本に対する認識がある。彼は、ニヒリズムによる無秩序の結果、暴力的独裁が求められたと分析する。そして、本当に暴力的な独裁に反対するならば、自ら進んで新しい秩序を建設していく必要があるという。そのため必要なのは「建設的構成的な合理性」である。

私は、二〇一〇年、ニヒリズムの問題に向き合うために上智大学文学部哲学科に入り、プラトニズムの再検討を行い、ドイツへの交換留学を経て、西田哲学研究を志すことになった。そして、私たちが「創造的世界の創造的要素」として捉える西田哲学を批判的に継承すること

で、ニヒリズムを乗り越える世界観の基礎を得た。その上で問題になったのは、「今の時代に何を造るか」だった。その問いに取り組んだのが三木清である。そこで修士論文では、三木の目指した「新文化」について、彼の技術論に軸足を置いて探究した。その際、三木の理論を発展させ、情報通信技術やバイオテクノロジーを論じた。

その研究の中で痛感したのは、本を読んで考えるだけでは、現代の文化について批評することしかできないことである。このままでは「物を造る人」にならない。そこで、私は博士後期課程への進学を取りやめて、IT企業に就職した。企画職としてITサービス開発に従事した後、より直接に生活文化に関わりたいと思い、総合的商業施設である「代官山 葎屋書店」で、バイヤー、フェア・イベント企

画担当、フロアマネージャーを経験した。

その時期には、企画を通じてデザイナー・アーティスト・作家・経営者など「物を造る人」たちと交流しながら、「新しい文化の方向性」を探っていた。そのような問題意識を背景に、社会学者の見田宗介から影響を受けることになった。彼は学生運動の時代以降、「実現すべきポジティブな社会像」を示すために、社会学の枠に収まらない探究を続けた人物である。そして、見田のインスピレーション源として、宮沢賢治を再発見した。

三木清より一才年上の宮沢賢治は、芸術・宗教・科学・思想・まちづくり・農業などの領域を横断して活動した人物である。彼は、詩・童話・コミュニティ・農産物・ランドスケープなど、物を造ることによって思索した。彼の活動を貫くのは「実験」の精神である。私は、新しい生活のスタイルを形づくった宮沢賢治と、西田と三木の哲学を組み合わせることで、理論的地盤にもとづきながら今後の文化に対する展望を構築できると考えるようになった。

私は今、そういったビジョンを模索しつつ、三つの活動に従

事している。第一に、宮沢賢治に関する研究であり、文献研究・ワークショップによる実験・実地調査をその方法としている(来年の刊行を目指して単著を執筆中である)。第二に、経営者やコンサルタントといった実務家とともに、哲学の視点を入れた組織論に関する探究を進めている。この探究に西田と三木の哲学をどう活かしているかに関しては、人文書院の「批評の座標」というWEB企画で論じた(若手の批評家が先行する批評家について論じる企画で、書籍化が予定されている)。第三に、現在の勤務先であるビジネス系出版社の書籍編集者として、哲学やデザインなどの視点を生かしながら、「コンセプトチュアルスキル」の習得を支援する書籍の企画・編集に取り組んでいる。このようにどちらかといえば理論と実践を媒介する役割を担いながら、私は「物を造る人」として歩みだしつつある。

上記のような活動をする者として、西田哲学研究に対して私が願うことは、主に二点ある。一つは「物を造ることと結びついた研究」が増えることである。その観点から、第二十二回年次大会における張政遠氏の発表は

興味深く感じられた。西田哲学にインスピレーションを受けながら「場所的経営」を独自に発展させた前川製作所のような事例が増えることが重要であり、私も実践の側でそれを実現しようとしている。

もう一つは「諸科学と連携した研究」が増えることである。今でも印象に残っているのは、代官山 葛屋書店で開催されたベルクソンに関するトークイベントでのワンシーンだ。登壇者である平井靖史氏と米田翼氏に質問した参加者が、自分は歴史学を研究する大学院生で、研究の方法論的な着想源としてベルクソンの時間論に関心を持っていて、と語っていた。「Project Bergson in Japan」は、そのような広がりを生んでいるのだ。いわばその西田哲学版として、難解な西田哲学を新しい概念と枠組みで語り直し、諸学との連携を模索する共同的探究プロジェクトが実現すれば、西田哲学は一層広く深い仕方、社会に影響を及ぼすに違いない。

**理事会報告**

**秋の定例理事会**

秋の定例理事会は二〇二三年十一月十二日にオンラインにて開催された。

●第二十二回(二〇二四年)年次大会について

まず、来年度の夏の大会を七月二十七日〜二十八日、立教大学においてハイブリッド方式で開催することが提案され、承認された。次に、大熊理事より、会場となる教室の予約状態やハイブリッドでの配信に関する打ち合わせ状況について報告が行われた。

講演とシンポジウムに関して、石井理事より、会長と幹事会での議論の結果、「西田幾多郎とベルクソン」が今年のテーマに選ばれたことが報告され、依頼する講演者とシンポジストに関して協議が行われた。

●井上克人先生追悼研究集会について

亡くなられた井上克人元理事の追悼研究集会について、西田哲学会は「後援」というかたちでの援助が提案され、異議なく承認された。

●上田閑照基金について  
西田哲学会・日独文化研究所

共催で行われた「西田・西谷ワークショップ」のプロシードイング集出版に必要な費用の一部を現在の上田閑照基金から支出することが提案され、異議なく承認された。

●インボイス制度の対応について

事務局より、インボイス制度の開始に伴って、西田哲学会でのインボイスの方向性が提案され、当面は対応しない方向が示され、異議なく了承された。

●編集委員会報告

石井理事から『会報』ならびに『年報』の編集進捗状況が報告された。

●第八期(二〇二四〜二〇二六)理事選挙について

事務局より、第八期の理事選挙の実施について告知が行われた。(森野雄介)

令和六年度第一回理事会(旧理事会)

西田哲学会第二十二回年次大会の開催に先立って、七月二十日十五時より、オンライン会議システムZoomにて、令和六年度第一回理事会が開催された。出席理事は二十一名(委任状出席七名を含む)、理事以外に幹事

三名が出席した。

●第二十三回年次大会について  
例年であれば「海の日」を含む三連休に開催してきたが、「海の日」を授業日とする大学が多いことを踏まえ、二十五日(金)〜二十七日(日)を候補日として検討することとなった。会場はかほく市。

●理事選挙について

事務局より、第八期理事選挙の結果が報告され、承認された。

●編集委員会報告

上原編集委員長より年報第二十一号が刊行されたことが報告された。

●事務局報告

(一)令和五年度会計報告、令和六年度予算案が提示され、承認された。

(二)入会希望者の入会、退会希望者の退会、除籍候補者の除籍が承認された。

●『年報』第二十一号の販売価格について

事務局より、『年報』第二十一号の制作価格が、通常の販売価格二〇〇〇円を上回ったため、販売価格を二三〇〇円/冊とすることが提案され、承認された。(中嶋優太)

夏の定例理事会

過日の理事会選挙を経て発足した新理事会により、八月十二日(月)に令和六年度第一回定例理事会がオンラインにて開催された。委任状提出者六名を含む全理事二十一名が出席し、以下の事項が決定された。なお、本理事会を通じて昨期幹事二名が陪席した。

役員選任

会長・理事互選により美濃部仁理事が再任。委嘱理事・ロルフ・エルバーフェルト、斎藤多香子、ブレット・デービス、アントニオ・ネット・フロレンティノー、松本直樹、林永強各昨期委嘱理事に再任を要請。編集委員長・秋富克哉理事が就任。副委員長については秋富理事に候補者の選定を要請、後日、理事会にて審議。監査・長町裕司会員に再任を、岡田勝明会員に就任を要請。

秋の定例理事会

第二回定例理事会を十一月初旬に開催。

第二十三回年次大会

七月二十六日(土)〜二十七日(日)に西田幾多郎記念哲学館(石川県かほく市)にて開催。美濃部会長、ならびに浅見洋・上原麻有子・ユサミチコ各理事

をコーディネーターとして国際シンポジウム開催の可能性を審議。

会報

会報発行部数を五百部から三百二十部に。十一月から一年間、会報バックナンバーを無料で頒布。今後は発行後一年で見本二十部を残し、哲学館による自由処分。

入退会

三名の入会を承認。

また、以上の審議事項に加え、事務局より

学会の財政状況

会員数の漸減と近年の会費納入率の低下により、収入、ならびに繰越金が年々、減少しており、何らかの対策が必要である現状が報告された。

(松本直樹)

上田閑照基金について

西田哲学会では、故上田閑照先生がご遺贈くださったお金を原資に、「西田哲学研究および広く日本哲学研究の推進と発展のため」に、「西田哲学会上田閑照基金」を設け、種々の研究助成をおこなっています。HPに規約と運用方針、各種申請書式が掲載されていますので、奮って

ご活用ください。

助成を受けられたトランプレー氏の書籍二冊が今年出版されましたのでご紹介します。

Jacynthe Tremblay, *Le Soi*

*égaré : Entretiens avec Nishida*

*Kitaro Tome 1. Les Presses de*

*l'Université de Montréal. 2024*

Jacynthe Tremblay, *Peregrina-*

*tions : Entretiens avec Nishida*

*Kitaro Tome 2. Les Presses de*

*l'Université de Montréal. 2024*

出版助成のほか、研究旅費にもお使いいただけます。ご申請をお待ちしています。

(美濃部仁)

西田哲学研究会のご案内

・寸心荘読書会「於鎌倉」

鎌倉の西田幾多郎博士遺邸

(学習院西田幾多郎博士記念館

寸心荘)にて、市民の方々と共

に西田幾多郎の著作を講読する

会です。原則、隔月の第一日曜

日の午後開催しております。現

在は『善の研究』第二編を讀ん

でおりますが、なるべく実生活

に即した視点から解説し、後の

西田哲学の展開にどのようなよ

ながっていかうかということも説

明しながら進めています。今年

度に入ってから読書会では、西田哲学と西洋神秘主義を代表するプロテイノスとがどのような異なるのかといった問題も取り上げました。

(岡野 浩)

・西田哲学研究会「於京都」

京都の西田哲学研究会は、対

面とオンラインの併用により、

ほぼ三ヶ月に一度のペースで開

催しています。オンラインでは

外国や遠方からも参加いただ

ており、対面の会場と合わせ、

毎回活発な議論が繰り広げられ

ています。六月末の会合から

『無の自覚的限定』に入り、その

第一論文「表現的自己の自己限

定」を前回九月の会合で読み終

えました。本件についてのお問

い合わせは、秋富(akiomi@kit

ac.jp)までお寄せ下さい。

(秋富克哉)

・山口西田読書会「於山口」

本読書会では、原則第一・二

土曜日に哲学講座、第三土曜日

に文学講座を実施しております。

令和六年八月三日現在で、

哲学が三五五回、文学が三七回

を数えます。哲学では西田の

「場所」を讀了し、「左右田博士

に答う」を講読中。文学では村

上春樹の『カンガルー日和』所

収の短編を講読中です。コロナ

以降、オン・ラインと対面のハイブリッド開催となっております。

参加者は院生、大学教員、

卒業生、社会人などですが、

オン・ラインのお陰で、石川、京

都、広島などからもご参加いた

だいています。令和五年三月に

は学生・院生、学者、卒業生、

地域住民の生涯の発表の場、「哲

学・文学同窓会」としての「饗

宴」(全体テーマ「人間を考え

る」)の第六回がコロナ後再開さ

れ、令和六年三月には第七回が

開催されました。山口西田読書

会の詳しい様子についてはHP

(<http://yamaguchi-nishida.org>)、ことに「読書会だより」

をご覧ください。

(佐野之人)

石川県西田幾多郎記念哲学館だより

元日の能登半島地震では、かほく市内でも震度5強を記録しました。館に大きな被害はなく、津波警報の間は多くの人が一時避難のために来られていました。現在は平常開館しています。

【企画展「奥能登の風光」開催中】

この度の震災で大きな被害を受けた奥能登は、幾多郎の弟子・西谷啓治の出身地です。西谷のエッセイを通して、能登の今とこれからを考える企画展を開催中です。会期は二〇二五年三月二十三日まで。



西田幾多郎書斎「骨清庵」で話す西谷啓治

【上田家資料の整理状況】

哲学館では、二〇二二年に、幾多郎の令孫・故上田薫氏旧蔵の関係資料を、そのご長男の潤氏より寄贈いただき、分類・撮影・翻刻を進めています。そのうち、一九三〇年代作成と推定される抜粋ノートの一冊（〇六四）に、ツタの押し葉が挟まれています（写真参照）。幾多郎が昭和八年十月に詠んだ短歌「己が廬の松にからみし鶯の葉と枯れし木の葉をいつくしみ見る」に登場する葉かもしれませぬ。

（高谷掌子）



「年次大会」におけるパネル発表・口頭発表、年報掲載論文の応募について

第二十三回年次大会（二〇二五年七月二十六日（土）〜二十七日（日）会場 石川県西田幾多郎記念哲学館）でのパネル発表と口頭発表、および『西田哲学学会年報』（第二十二号）掲載論文を公募します。

【パネル発表】

一つのテーマについて数人で提題と討論をおこなうパネル発表（日本語あるいは英語）の企画を公募します。

発表をご希望の方は、①テーマ、②八〇〇字程度の趣旨、③代表者（当会B・C会員）の氏名と住所（文書等の送付先）、④パネル発表参加者一覧を添えて、【二〇二五年二月末日必着】で、事務局宛てに郵便と電子メールにてご応募下さい。テーマと参加者氏名については英文表記もお知らせ下さい。採用の可否については、締め切り後に審査の上、可及的速やかにご連絡いたします。

応募資格・少なくとも代表者は当会B・C会員であること（代表者以外は非会員であってもかまいません）。

発表時間・討論を含めて全体で九十分。

【口頭発表】

年次大会での口頭発表（日本語あるいは英語）をご希望の方（当会B・C会員）は、①タイトル、②八〇〇字程度の発表内容概要、③簡単な略歴、④主要な業績リストを添えて、【二〇二五年二月末日必着】で、事務局宛てに郵便と電子メールにてご応募下さい。また、発表タイトルと氏名の英文表記もお知らせ下さい。審査を経て、発表者が決定されます。

【西田哲学学会年報 論文】

『西田哲学学会年報』第二十二号（令和七年七月発行予定）。詳細は下記をご覧ください。西田哲学会ホームページ『年報』掲載による『西田哲学学会年報』投稿規定・執筆要領（二〇一九年六月三十日改定）。

第二十二号掲載分に関しましては、締め切りが令和六年十月末日となります。ご投稿いただいてから概ね一週間以内に着信の連絡をいたします。返信がない場合、何らかのトラブルで届いていない場合がありますので、改めて事務局までお問い合わせ

わせ下さい。

会報（第十五号〜第二十二号）の頒布について

会報は学会ウェブサイト「事業」欄に掲載しています。冊子版の在庫整理のため、会報第十五号〜第二十二号を希望者に頒布します。ご希望の号数と部数を明記のうえ、返送用の切手を同封して事務局まで郵送にてお申し込みください。または、年次大会の受付でお渡しすることも可能です。

編集後記

会報第二十二号をお届けします。従来通り、七月開催の年次大会報告が中心となりますが、本大会は、大熊玄理事のご尽力のもと、立教大学で開催され、大盛況のうちに終りました。対面とオンラインのハイブリッド形式もほぼ定着した感がありますが、オンライン環境の設定には大学の職員の方々にもご協力いただいたようで、大会一つ実施するのにどれだけの方々の努

力が投入されるかを改めて痛感します。パネル発表が増えたのも今大会の特色でしょう。大会報告以外にエッセイや各種情報も満載ですので、どうぞお楽しみ下さい。

なお、理事の改選に伴って、編集委員会も顔ぶれが変わり、委員長職を仰せつかりました秋富他、竹花洋佑氏が副委員長、大熊玄氏、張政遠氏、中嶋優太氏の五名で進めてまいりますので、よろしくお願

（編集委員長 秋富克哉）